
困った彼

蒼くない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

困った彼

【Nコード】

N2469B

【作者名】

蒼くない

【あらすじ】

学校で書記をする章一はいつもは優しいけれども、屋敷に帰るとセクハラなご主人になってしまう。それでもなんだかモテている彼の日常生活というかラブコメです

prologue (前書き)

はい。初投稿です。

シリアスなのかラヴコメなのかわからないラノベっぽい小説が好きです。という事で書いてみました。

まあ楽しんでもらえれば嬉しいです。

prologue

その日僕は母さんに連れられて大きなお屋敷にいた。

母さんは出かける前に

「今日は特別な日になるから」

とか言っていたけど僕には何のことかさっぱりわからなかった。

屋敷に入ると母さんは出迎えてくれた男の人と話し込んでしまう。

そうなる暇でしようかなかったけど子供心に楽しそうに話す2人の会話に入れなくて僕はテーブルの上のケーキを食べていた

ケーキを食べてしまうと何もする事がなくなってしまう。

仕方なく周りを見回していると一人の少女と出会った。

僕は彼女に話しかけた

彼女と僕は年が近かったし、彼女は聞き上手だったから僕はいつの間にかいろんなことを話していた。

僕には友達といえる友達はいなかったから、母さん以外でこんなに話したのは初めてだった。

それは僕にとって今でも大切な思い出であり、そして彼女は大切な存在だとも思っている。

第一話

「…きてください章一さん。起きてください。もう朝ですよ」
微睡むような眠気の中でソプラノがかった声が俺を呼んでいる。
そしてその声に合わせてるように揺さぶられる体。

しかし彼女は気付いていないようだ。

そのソプラノがかった声もそれにあわせて揺さぶられる事も俺を再び夢の世界へと誘おうとしている事を。

このまま微睡んでいてもいいのだがそれだけではつまらない。

そうおもうと俺は薄目で彼女を確認すると、自分の体をゆする彼女の手を左手でつかみ無理矢理引っ張った。

「起きてください章一さん。起きてください…きゃっ!？」

当然彼女の体はベッドに倒れ込み自然と互いの体が近づくことになる。

そして俺は右手で彼女の胸をつかむ。

むにゅ

そして俺は目を開けると彼女彩音に笑顔で挨拶をする。

「おはよう彩音。いい触り心地だ。」

柔らかな感触とともに彩音の顔がたちまち赤くなり、ぱつと俺の体から離れる。

「なっ…章一さん!!朝からセクハラはやめてください!!それに早くしないと遅刻しますよ!!」

彩音は顔を紅潮しながら怒ったようにまくしたてると俺の布団を取り去る。だけれど彩音は怒っても全然恐くなく、むしろかわいく見えてしまう。

そう彼女早川彩音は俺の屋敷にとめるメイド見習いであり、俺専属のメイドでもある。彼女は黒と白のエプロンドレスというまさし

く『メイド』といったような感じの服に身を包んでいる。そしてそれはかわいいけれど凜とした雰囲気を持つ彼女にぴったりだった。身内びいきというのを差し引いても彩音は十分に美人だ。

そして俺は再び彩音を引き寄せ抱きしめる。

「彩音。今日もかわいいね。」

そついうと彼女は一層慌てはじめ

「なっ、何を言うんですか章一さん!!」

とかいうと俺を叩こうとするので素早くベッドから起き上がり避ける

「にしてもいつまで俺の部屋にいる気なの? いまから着替えるんだけど。あっそうか。俺の着替えが見たいのか」

そこまで言つと彼女はもう爆発しそうなくらい顔が赤くなって

「しょ…章一さんのバカーっ!!」

と近くにあつた枕を投げながら出ていくのだった。

着替え終わって居間に出てみるといい匂いとともに朝食の準備をしている彩音の姿が見える。

「おはよう彩音。いい匂いがするね。にしても祥子さんはやっぱりまだ?」

と後半苦笑混じりに言つと彩音の方もつられてか苦笑混じりに

「はい。母さんは朝弱いですから。」

と答える

そつ彩音の母もここでメイドとして働いている。

だからこそ彩音がここでメイド見習いとして働いているのだが、祥子さんは極端に朝に弱くいつも起きてくるのは9時半くらいなのだ。その上謎多き女性で30代になっているくせにまるで二十歳前後のように見えるし、十分に大人なくすにポワツとしていて凜とした雰囲気彩音とは正反対だ。

まあどちらも美人であることには変わりないのだが。

他にもうちの家には何名かのメイドや執事などのお手伝いさん達が

住み込みで働いている。彩音はその仲で最年少で一番年も近いので俺の身の回りの世話をしている。

まあそうは言っても俺は自分でできることは自分でやるから彩音に任せる事は限られてはいるが。

テーブルの上に乗った朝食はご飯に味噌汁、焼き魚という和食だった。

二人で席につき朝食を食べ始める。

彩音がつくる朝食はいつも食べているものだがいつも通り美味しくて

「おいしいよ。やっぱり彩音の料理はいつ食べてもおいしい。」

とかいつも通りほめてしまう。

「ありがとうございます。」

とか言いながら食事をとる。

なぜ朝起きてから両親に会わないかというと、俺は母さんの連れ子で今の父親つまり義父とは母さんが再婚して十年になるのだが未だにラブラブで十周年記念とかいうことでバリとかハワイとかにバカンスで一年間は行っているのだ。

全くこの年になっても未だにラブラブというのもどうかと思うが仲が悪いよりはいいし、旅行に行っているおかげである程度の自由も認められているのだ。

さてご飯も食べたことだし今日は何をしようか…

「映画面白かったですね!!」

映画館を出ながら興奮した彩音が話しかけてくる

うん、喜んでくれて何よりだ。

今日は休日だし欲しいものがあるから買い物を手伝ってと言ったのは祥子さんが起きてきて3人で談笑していた時だった。

祥子さんは気を利かせて用事があるからと言いながら俺にウィンクをしてくれたがデートじゃないです。だいたい俺と彩音は付き合っ

てないし、今日の目的はいつも身の回りの世話をしてくれる彩音へのささやかなお礼のつもりだ。

買い物を終えたて食事をして何したいと聞くと彩音は映画館に行きたいと言った。

恋愛映画を妙にこだわったのはちょっと驚いたけど、まあ女の子だし当たり前だろう。

帰り道を歩いていると彩音が決意を決めたような顔をして聞いてくる。

「今日は…どうして誘ってくれたんです？」

どうしようか…本当の理由を話すのもやだし、はぐらかそう。

「ん、買いたいものがあつたからね。それに一人で行くのって寂しいじゃん。」

そう答えると

「…でも、あれってすぐ終わる買い物じゃなかったですか。学校の帰りに寄ればいいような。」

バレてしまったか。

「…本当はさ、いつも彩音にいろいろしてもらってるから自分なにお礼をしたかったんだ。」

そういうと、彩音は少しがっかりした感じで答える。

「…何を期待してたんだろうか。」

「…そうですか。でも私は全然迷惑じゃないですし。章一さんのお世話をするのは楽しいですよ。」

彩音は続ける。

「それに今日はとても楽しかったですし、章一さんのメイドで良かったと思います。」

うんやっぱり彩音はとてもいい子だと思う。

…なんだか照れくさかったけど彩音がいてくれてよかったと思う。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。これかもよろしく彩音。」

「はい、章一さん。」

第一話（後書き）

はい。

いきなり章一と彩音がデートみたいなことになってます。

しかしこの2人付き合ってはません…

次回から章一の悪友とか美人の生徒会長とかなんか定番な人たちが
でてきますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2469b/>

困った彼

2010年10月18日15時13分発行